

未来の資源大国・日本

昨夏、中国の長江流域、東北地域の嫩江・松花江流域は大洪水に見舞われ、被災者数、農作物被害面積、被害額等いずれも史上最悪の事態であったと伝えられている。大洪水の原因は、「7割天災、3割人災」とであるとされ、人災として、干拓による河川・湖沼の縮小および森林の減少による土砂の流出が指摘されている。こうしたなかで昨年の中国の食料生産は結果的には前年並みの豊作となったこともあって、あらためて中国の農業生産にとっての最大脅威は干ばつであることが浮き彫りとなり、植林の重要性とともに、節水農業の早急な確立の必要性があらためて実感されることとなった。

また、中国に続く人口大国であるインドは、年率2%以上の人口増加が続いたにもかかわらず、緑の革命による単収増加により穀物生産の増加を確保してきた。しかしながら、生産増加をもたらしてきた基本施設の一つである灌漑システムが、地下水の枯渇、水質の悪化、塩害による農地の不毛化等によって先行きに深刻な影を落としている。

さらには少し前にテレビのスペシャル番組で、農業大国アメリカ・中西部の穀倉地帯では、これまで汲み上げてきた地下水が枯渇し始め、トウモロコシ等収量の顕著な落ち込みが見られていることが報道された。

こうした現象を見るにつけ、これからの農業の最大問題は水の確保にあると考えざるを得ない。また、21世紀の三大課題として食料・環境・エネルギー問題が挙げられることが多いが、環境・エネルギーのベースにあるのも水であり、水問題への対処が地球の未来を大きく左右しかねない。水の安定確保には植林・森林保全によるしかないのである。

海外へ足を運んでみれば、我が国では当たり前の森林風景が、地球全体として見ればきわめて特殊であることはすぐ実感できる。国土の3分の2が森林で覆われている我が国は、森林資源ひいては水資源の大国であり、この貴重な資源を維持していくことは我が国の果たすべき最も大切な使命の一つである。水汚染についての関心は高まりつつあるものの、イザヤ・ベンダサンが指摘したように、日本人にとっては安全と水はタダ、空気のようなものであって、水なり森林の重要性についての国民の認識は残念ながら乏しい。

我が国の荒廃した森林を維持・管理していくには、林業が経済的に自立可能であることが前提となるが、外材の輸入に押されて国内の林業経営は悪化し、担い手の確保もままならない現状にある。経済性の確保と森林の持つ公益性の発揮という相反する二つをバランスさせ、そのために国等が必要な支援措置を講じていくことは重要課題である。新農業基本法が目下、国会で審議中であるが、林業基本法も昭和39年に施行して以来取り巻く情勢は大きく変化した。あらためて国民的視点での抜本的な議論が必要な時期が到来しているように思う。

((株)農林中金総合研究所取締役基礎研究部長 蔦谷栄一・つたやえいいち)